

## 修験道研究の回顧と展望

代表者： 鈴木 正崇

和歌森太郎の修験道研究とその発展・展望—宗教史の立場から— 関口真規子 (埼玉県立文書館)

岸本英夫・堀一郎の修行論—宗教学の立場から— 長谷部八朗 (駒大)

五来重の山岳信仰・修験道論—宗教民俗学の立場から— 鈴木 昭英

修験道は民族宗教か?—宗教人類学の立場から— 鈴木 正崇 (慶大)

コメンテータ： 宮家 準 (慶大)

司会： 鈴木 正崇 (慶大)

修験道の研究は宗教学・民俗学・地理学・歴史学など様々の分野から繰り広げられてきた。戦前では、宇野圓空、村上俊雄、和歌森太郎、岸本英夫など、戦後では堀一郎、村山修一、五来重、宮家準、鈴木昭英、宮田登、宮本袈裟雄などにより、日本の宗教文化の核になるものとして注目され、教義と実践の双方から研究されてきた。また、各地の修験道については、羽黒山の戸川安章、彦山の長野覚などが地域に密着して考察を進めてきた。その後、『山岳宗教史研究叢書』の刊行や、日本山岳修験学会による研究の組織化を通して、各地の霊山の研究も深化した。学会の機関誌『山岳修験』も通号で50号に達して、大峯山・彦山・出羽三山などに留まらず、各地の霊山の実態と変化が明らかにされた。特に、宮家準は『修験道儀礼の研究』『修験道思想の研究』『修験道組織の研究』の三部作と、『大峯修験道の研究』を著し、2012年には『修験道の地域的展開』を刊行して集大成を行い、研究水準を飛躍的に高めると共に、修験道研究という分野を確立することに貢献した。

修験道や山岳信仰の研究に関しては幾つかの課題があり、整理してみた。①山岳信仰が民衆社会に浸透していく様相を修験道と関連付け、特に民間習俗の変容に着目して明らかにすること、②近世の民衆の間で盛んになった山岳登拝の講集団に注目して、その機能や展開を信仰圏も含めて考察すること、③修験道教団の儀礼・思想・組織を体系的に論じること、④本山派や当山派の成立と展開を史料に基づいて検討して、教団の組織史として研究すること、⑤山岳信仰と修験道の歴史的展開を山岳考古学の立場から論じ、遺跡や史料に基づいて明らかにすること、⑥霊山に伝わる縁起の読み解きと地域化・土着化を論じること、⑦政治権力と寺社勢力、政治と宗教の葛藤・衝突・融合の諸相を、山岳信仰や修験道を通じて考察すること、⑧修験道から新宗教への展開を解明すること、⑨近代の神仏分離以後の修験道の復興や各教団の動きを解明すること、⑩修験道が民俗芸能や口承文芸、唱導に果たした役割

を論じること、⑪文化遺産や文化的景観などの文化財化がどのような影響を及ぼすか、特に地域おこしや観光化、エコツーリズムとの関連を考えること、⑫スピリチュアリティやパワースポットなど現代の靈性文化と修験道の関係を問うこと、⑬広くアジアの山岳信仰研究の中に位置付けることなどである。

本パネルは、修験道研究の成果を批判的に考察する。特に研究に画期をもたらした代表的な研究者の学説を再検討し、今後の修験道研究の可能性を探りたいと考えている。パネリストとして、関口真規子は宗教史学の立場から和歌森太郎を、長谷部八朗は宗教学の立場から岸本英夫と堀一郎を、鈴木昭英は宗教民俗学の立場から五来重を論じ、鈴木正崇は宗教人類学の立場からアジア研究との接合を考えることにする。宮家準はコメンテーターとして、先学の研究の総括と今後の課題について問題提起する。修験道研究の今後の在り方を総合的に考えて、将来に向けての研究課題を明らかにすることを目的とする。